

老人クラブの会員減少と対応策の検討

—A県における老人クラブの現状と課題の分析—

○合同会社 地域計画 熊谷智義 (007774)

キーワード: 老人クラブ 高齢化 会員減少

1. 研究目的

わが国の高齢者人口は増加を続け、2020年の65歳以上人口は、36,026,632人、全人口に占める割合は、28.6%に至っている。その中で、1998年、全国の老人クラブ数は134,285、会員は887万人であったが、それをピークに減少に転じ、2021年には、89,498クラブ、471万人となっている。

全国老人クラブ連合会では、減少した会員の復活を目指し、2014～2018年の5か年計画で、会員増強運動に取り組み、東北地方のA県老人クラブ連合会（以下、A県老連）においても、会員増強運動を実施している。その結果をふまえ、A県老連では、2022年度に「老人クラブのあり方に関する検討委員会」を設置して対策が協議されている。そこで、本稿では、A県における会員増強運動の取り組み状況と結果、課題及び今後の対応策の検討にあたっての論点を報告する。

2. 研究の視点および方法

最初に、老人クラブの活動や組織のあり方などに関する先行研究のレビューを行う。次に、A県老連の会員増強運動の実施状況及びその結果から浮かびあがってきた課題について整理する。また、課題をふまえての今後のあり方、対応策の論点について、試論的な整理を行う。

3. 倫理的配慮

本報告は、一般社団法人日本社会福祉学会「研究倫理規程」及び「日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」に従い、組織や団体、個人の名称が特定されないよう配慮した。

4. 研究結果

(1) 先行研究における論点

久田（2016）は、老人クラブの状況を、①ピーク時は高齢者の半数が加入していたものの、減少に転じ組織率が低下している、②クラブの規模は平均60名、③2014年には80歳以上の会員が4割を占め、④会長の85%が男性で、70代後半と80歳以上を合わせて67.7%を占めていると報告している。

また、老人クラブの現状と課題に関して、張（2016）は、福岡県のY市老連を対象に、文書調査、聞き取り調査や参与観察等を実施し、会員減少の要因を、①一般会員にとって、所属連合会からの参加要請や案内等に負担感を感じていること、②会長や役員職になることを避けたいと感じていること、③これらの点に具体的な対応策が出ていないこと、④単位クラブに対して「自主性」を強調しすぎ、関心不足、支援不足をもたらしていると指摘している。

一方、村上（2018）は、超高齢社会における老人クラブの役割に関し、「高齢世代」を「現役世代」が支える負担増大の課題を解決する論点として、①地域の高齢者の力を集めて社会活動を展開することでその力を地域社会へ還元すること、②健康増進活動や趣味の活動、学習活動、親睦活動等を通じて、高齢者の心身の健康を持続・向上させること、③見守りや訪問、サロンの開催、生活支援活動等、高齢者同士の世代内支援を行うこと、④世代間支援活動として、子育て支援、小学生の登下校時見守り、放課後児童クラブへの協力等を通じて、子育て環境の整備に貢献することをあげている。

(2) A県における会員増強の活動

A県老連の会員増強運動では、各単位クラブあたり毎年2人の加入を目標に、各市町村老連では、

①未加入者も参加できる体験型の事業や行事の実施、②解散・休会クラブの防止、③目標達成クラブの顕彰、④学習・情報交換の場づくり、⑤加入促進に資する教材やチラシ等作成・提供など、各単位クラブでは、①友人・知人への声かけ、②クラブ活動や行事への参加呼びかけなどに取り組んだ。

このような会員増強運動の結果、基準年とした2014年度の会員数79,559人に対して、5年間増加に転じることを目指したものの、会員減少に歯止めをかけることは出来ず、2018年度末の実績値は、63,574人、5年間の減少率は、20.1%であった。

その後に行われた市町村老連及び単位クラブを対象としたアンケート調査の記述式回答からは、5年間の取り組みを振りかえり、それぞれ、①会長のなり手不在による解散および新規加入の少なさなど会員減少の状況、②知人友人を介しての加入呼びかけなどによる会員増の取り組み、③女性の声を聞くことによる活性化などの活動のあり方について、そのほか様々な意見が寄せられている。

5. 考察

(1) 会員減少の状況と課題

A県老連では会員増強運動に取り組んだものの、会員減少の歯止めとはならなかった。会員減少の原因は、①会員の自然減(死亡、施設入所、転居等)、②単位老人クラブの解散・休会、④会員の退会、⑤新規加入が進まないことなどである。また、入会しない理由として、①未だ老人と思わない、②現役で働いている、③老人クラブの名称に抵抗がある、④人間関係がわずらわしい、⑤高齢で行事に参加できないなどがあげられている。

(2) 今後の取り組み方向

老人クラブ運営指針から、その目的は、①仲間づくりを通して、生きがいと健康づくり、生活を豊かにする楽しい活動を行うとともに、②その知識や経験を生かして、地域の諸団体と共同し、地域を豊かにする社会運動に取り組む、③明るい長寿社会づくり、保健福祉の向上に努めることである。また、老人クラブ組織の性格については、①自主性、地域性、共同性を有し、②総合的な展開と多様な活動形態をとり、③各世代、男女が共同して民主的に運営することの3つがあげられている。健康、友愛、奉仕の3大活動は、介護予防や高齢者の孤立防止、持続的な地域社会の形成に向けた、地域貢献の活動ともいえる。村上(2018)は、超高齢社会に対応して活力を維持していくための、貴重な「セーフティネット」としての老人クラブの存在意義と可能性を再認識すべきと指摘している。

また、今後の取り組みについては、会員の声、ニーズに合わせた満足度の高い活動の実施によって、単位クラブの解散や休会、退会を抑えるとともに、会長や事務局担当の負担軽減を図り、後継者を育成することが必要とされている。高齢で行事に参加できないという声に対しては、ゲームや健康体操、軽スポーツ、お茶を飲みながら雑談する会、温泉巡りなど、活動の工夫が求められている。

組織運営に関しては、代替わりの時期を迎えつつあることから、世代交代がスムーズに行われるような運営の仕方、仕組みづくり、さらには、男女共同参画の視点も重要である。

[引用・参考文献]

- A県老連(2022)『第1回「老人クラブのあり方に関する検討委員会」参考資料』,2022年6月30日。
 久田兼雄(2016)「減少から増勢へのみちを模索する老人クラブ—全国老人クラブ連合会実態調査から見る老人クラブの現状」『月刊ゆたかなくらし』全国老人福祉問題研究会編,pp.10-14。
 村上寿来(2018)「超高齢社会における老人クラブの役割」『月刊福祉』pp.48-49。
 全国老人クラブ連合会(2014)『老人クラブ「100万人会員増強運動」5か年計画(平成26~30年度)』
 張乾坤(2016)「地方都市における老人クラブの現状に関する考察:Y市シニアクラブ連合会の事例から」『人間科学共生社会学』7,pp.47-57。